

幼児教育カリキュラムをめぐる

社会性の問題



成田 錠 一

社会性ということばの幼児教育界への高い普及度に比べて、その保育内容への取入れの貧しさという現実を、カリキュラムという観点から分析を進める前に、その考察の基盤として存在する、ひいては新しい、理想的な幼児教育カリキュラムへの前進を阻んでいると思われる今日の幼児教育上の二、三の問題点に簡単に触れてみたい。

まず第一には、我が国の幼児教育が、幼稚園と保育所という二元化の方向をとっていることである。両者の統一への要求はますます強く、しかも現実には、収容幼児の入園、入所理由、経済的負担、保育内容等の上で本質的差異が認められないにもかかわらず、ふしぎにも子どものいないおとなの世界で、その分離、対立はいよいよ激しくなりつつある点である。第二に特定地域はいざ知らず、全国

的には少なくとも就学前年次の幼児で、幼児教育施設において保育経験を持つことの出来ない者が未だ多数存在する点である。この事実と、幼稚園・保育所で、またはその個々の施設において、それぞれ理想的カリキュラム研究が進められるという基本的態度とは何ら矛盾するものではないにしても無視するべき問題ではない。第三には文部省の幼稚園教育要領における、いわゆる六領域の問題である。この問題は、前二者に比べて、それが制度上の問題ではないところに、より重要な意味を持つことになるだろう。多くの識者が指摘する如く、それが次元の異った領域の単なる羅列にすぎないという点は論外にしても、そのことがきびしく存在しているという事実は、指導要録における行動評価に至るまで六領域評価を迫られる保育者にとっては、悪い意味での六領域意識から抜け出すことを困難なも

のとしよう。市販カリキュラムの一部に見られるような部分的領域再編成も、この事実の前にもどれ程その本来の意図が徹底出来るか甚だ疑問である。第四の問題点は、社会、あるいは社会性そのものの内容理解の不統一、概念のアイマイさという点である。

以上のような幼児教育上の問題点を背景にして、初めに社会性とカリキュラムの中心、保育目標との関係において問題をとらえてゆくことにする。幼児教育カリキュラムは、理想的にはその本来の意味からして備えるべき基本的条件が存在するが、それは幼児の身心の発達に基礎を置くということと、そして次の教育段階としての小学、中学、高校のカリキュラムの間に、教育上の一貫性を持たねばならないという二点であろう。このような意味での段階性と一貫性を具えなければならぬ性格のものであることは言うまでもないことであろうが、前述の問題点(一)(二)が現実には大きな壁となつて、特に後者は大きく後退を余儀なくさせられよう。(例を幼稚園のみに限ってみても、教育要領、学習指導要領の改訂もこの問題の解決になつていない点は既に指摘されているところである)ここにおいて幼児教育カリキュラムは現実への妥協の道を歩まざるを得ない破目に立たされることになる。良い意味での現実への妥協の中で、最善の道を見つけないければならない。そしてその行方はカリキュラム構成の中で、保育目標に求められることになる。即ち保育目標の設定という過程の中に、少なくともある程度は次の教育段階との一貫性

をもちこむという最善の妥協がとられよう。このような一貫性という意味において、学校教育法すらその教育目標を具体的に明示することを避けていることから考えても、保育目標の設定こそカリキュラムの生死を握る重要な問題であることは明らかである。

今や保育者の一人ひとり、教科的性格のカリキュラムの欠陥を知っているし、行事中心、羅列的単元の無意味さも保育目標との連なりの中で知ることが出来た。幼児教育施設が花園でも託児所でもないことも明らかである。今日における社会と子どもの現実に見える道は、具体的には保育カリキュラム、保育目標の検討から始められるべきであろう。それでは一体どのような形をとつたらよいだろうか。個々の保育者の人生観、児童観はさておいて、前進するスタイルか、可能性をはらんで最小限度の社会適応をめざすか、それとも両者をマッチさせた人間像かという保育目標の中心問題も、厳密には従来の保育・生活経験中に、全く新しい領域(生産的、経済的、社会的)が現実として導入され得るかどうかということ、逆に言えば現在の幼児教育が従来からの多分に有階級級のおもむきを持つているという事実にも左右されようが、可能な限りの最小限の目標として、民主社会への適応をめざす望ましいパーソナリテイの基礎を固めるといふ考え方が、より現実的妥協性を持つてくるのであるまいか。教育要領目標Ⅱ「園内において集団生活を経験させ、喜んでこれに参加する態度と自主、自立の精神の芽えを養うこと」

をことさらに、五目標中の中心目標として引用するまでもなく、個人の独自性、発達の可能性、人間尊重をふまえた上での、それは、民主的社會生活への方向づけであり、適応であり、評価さるべきは、遊びへの態度であり、仕事への方向づけのあり方であろう。社會への適応、集團への適応がその基底をなすべき内容であることは疑えないところである。いわゆる社會性は、このような意味において、カリキュラム全体の中にその位置を見つけることになる。しかもこの意味においてのカリキュラム全体における社會性の位置、即ちそのような教育（保育）目標は、前述の問題点(一)(二)が解決された時における、理想的な統一的な幼児教育カリキュラム、及びその目標と何ら相容れないものでもなからうし、いわんや幼稚園という一部の幼児教育部門における、小学校との一貫化の布石かの如き、教師名称、給与の統一、指導要録抄本の小学校への送付の義務づけ、指導要録の形式的貫化の実施などによって決して左右されるべき内容でもあるまい。しかしながらこのような目標達成の爲には、そのプロセスの中で多くの困難を持ち、多くの努力を要するが故に、ややもすれば軽視され、無視され、安易な形式的なものによってかえられがちであるということは注意しなければならない。いわゆる教育に名をかりた幼稚園の學校化、特殊性の強調化は、その最たるものではあるが、それよりもなおその意味する本質とは似て非なる方向にもってゆかれるあやまつた解釈こそ最も注目しなければなら

ないだろう。単なる集團行動のくりかえしや、押しつけがましい一方的、羅列的なしつけによって、子ども達が就学時に見せるあの独特の不安や頑固さは消しうるものではない。一人ひとりの幼児への豊かな愛情が要求されよう。冷静な客觀的態度も勿論必要であろうが、それにもましてそのような目標のカリキュラム化の爲の理論的ウラづけに対する、心理学、教育学的資料の不足はいなめない事実である。この点に比べて、幼稚園・保育所の學校化——言語、数、音楽などの知識の系統的伝達を保育内容とする意味で——の動きはさほどこの目標にとってマイナスとはならないだろう。文字學習の禁止、教育の否定いずれも、理論的根拠が薄弱であることや、幼児教育の他の側面——幼児期は行動的、実践的場において、除々に問題解決的知性、系統的知識、技能の初歩を身につける時期であるという——の部分的強調化が、そのような動きの拠りどころとならうが、幼稚園・保育所の私塾化はもとより望むところでないとしても、前述問題点(三)との人間的矛盾の故に陽かげでくすぶるよりしやうがない運命であろうから。

次にそのような保育目標の保育内容、生活経験への展開化に際してより困難性を深める他の要因として再び六領域の問題を持ち出さなくてはならない。六領域のはらむ種々の問題中、特に「社會」のあり方について考えてみたい。その内容が、自主・独立という個人的側面と現實社會への理解に目を向けようという二つの側面を持つ

という作製者の意図についての説明がいくらかえされても、その持てる力——幼稚園での最低基準、最低限度の内容を示すものという意味で——が、経営者、保育者という受け手の側にすれば、きびしい現実のおきてとして受けとられている事実にてらし合せるまでもなく、全生活領域にひろがるべき部分が特殊な部分的領域の中で強調されているかの如く認識されようとしているのだ。この場合の「社会」という日本語の用法もさることながら、幼児の生活領域を、小学校のそのように、時間割的、教科的色彩でもって処理される危険性は、月刊保育雑誌の責任とするには余りにも罪深いものがありはしないだろうか。便宜上の手段と最終目標のすりかえられる恐れがこのあたりから生れてくるのだ。かくの如き観点からすれば、この「社会」の問題は、幼稚園よりも保育所でもより問題にされねばならないという意見も、ただ単に問題の本質を他にそらしてしまう以外に何の意味もない考えであるし、同じ意味において、「社会」の内容中で、好ましいパーソナリテイの基本的内容としての、個人の集団生活への参加の態度、協同、自主、及び自律という施設幼児教育の中心、保育目標の重要な中心が、幼児の全生活領域をおおい、その基底として存在するという考えは、社会の代りに言語が中心となつてもよいとする理論によって否定されるものではない。このことは、現在の「言語」の保育内容からも、また言語の本質的特性——それは社会生活場面に用いられる機能——からしても本質

的には問題にならないだろう。

以上は主として意識面における問題を考えてみたが次に技術的な部分における目標具体化の困難性の要因を考えよう。先ず最初に保育内容の主領域、音楽リズム、絵画製作という領域が、従来の伝統的保育法の影響をうけて、比較的系統立てて抵抗なく展開されていることがあげられよう。そこで月間目標を集団生活の発展という集団構成の側からとらえたり、社会領域を再分化させ、その中に生活指導という領域を入れる方法をとったりするのは、何れもこの意味では前進に外ならない。しかしながらこれらの努力に答えねばならないのは保育者の理解の問題であるとするのは、一方的押しつけてあって、その前に解決しておかねばならない問題は、社会性の概念の明確化とその育成の場、集団構成の持ちかたという点と、それに連関して、もし生活指導という領域をもうけるならば、それによっていきおい、経験の具体化、項目化を迫られ、ひいては指導領域の狭さ——当番・行事などと限定される——をどのように解決したらよいかという点であろう。絵画、製作、音楽リズムというような領域が、伝統的習慣と比較的系統化された技術的内容を持ち、いわゆるカリキュラム化が容易であるという点、そこでそれらが主内容になり易い点については、絵画や音楽を通じて、人間的興味、欲求満足のプロセスを通じて、単なる過去の表現というのでなく、集団への適応、社会性、創造性豊かな人間を育てるという指導方向もあり

はしないかという面について、専門の人達の研究をお願いし、現場保育者には、日々の保育の持ち方、指向のあり方の中で、各領域をカッキリと分けないで、自然と社会観察とか、音楽と絵画というように、何かに重点をおいて少しずつ領域をまとめてあつかうといった技術的努力を是非とも実らせていただきたいものである。そしてそのような努力によって、いわゆる便宜上という壁も破られようし、幼児の発達の姿が全体的に未分化だという姿にのっとった保育の道も、ひいてはここでねらいとしようとする目標が、幼児の全領域をおおうという本来の形も可能性へ一歩ずつ近づくことにならないだろうか。

最後に残された社会性の概念の明確化とその育成の場、集団の持ち方という点についてふれてみたい。社会性の概念については、多くの論議が試みられているが、現在の段階で理解されている事柄は、それが発達の多面性を持つものとしてとらえられていることと、その多面性の故に、個人のパーソナリティ、人間性と密接な関係を持っていることだろう。その主なる心性が何かということも、それを「待つことの出来る心」とも、「友情」とも呼び得ようが、いずれも、人間尊重、人間権利の尊重という、指導上、教育上困難な内容であることについては、その概念のアイマイさと共にまた事実である。しかしながら困難ではあるが、保育は行なわれねばならない。

幼児思考の本質からいって、正しい人間理解の上に立って、民主社会

における人間関係の基礎的技術という部分から手をつけ、具体化が始められなければならない。単なる集団的行動のくりかえしや、「行儀よくしなさい」と言っているだけでは達成出来るものではない。具体的に物を媒介とし、人を媒介にして、幼児―幼児という関係の中で、幼児自らが創り出す場を、遊びや行事のただでなく音楽リズム、絵画製作などをふくめた全生活領域の中で持たせねばならない。人間の孤独は何時、心の奥にしまわれなければならないか、自己中心性はいかなる場面ですてられねばならないか。具体化の手がかりはここにもあるだろう。それと同時にこの具体化は発達の段階もふまえねばならない。自分の物の始末から、他人のもの、みんなの物という概念の発展、みんなと話をきいたり、みんなの前で話が出来ることからグループで協力出来るまで。問題が困難で、他の領域、心性の訓練、教育に比べて科学的でないという理由からゆるがせにさるべきでなく、今こそこの問題、この領域の開拓が、科学的に組織的になされねばならない。そして絵画製作、音楽リズム等という領域が、小学校との一貫性を独りよがりにも急ぐあまり、それぞれバラバラの目的をとり上げて、混乱を深めるよりも、現実的には、述べ来たったような施設幼児教育の主目標達成の下に、その手段としての意味を認めるところに、現代の幼児教育のなっとく出来る意味を明らかにすることが出来るのではあるまいか。

(名古屋市立保育短期大学)